

赤鱗えびは毛物のごとき眼もて見る

〔凍港〕昭7

山口誓子

一枚の餅のごとくに雪残る

〔川端茅舎句集〕昭9

川端茅舎

玉の如き小春日和を授かりし

〔松本たかし句集〕昭10

松本たかし

金魚大鱗夕焼の空の如きあり

同

同

たましひのたとへば秋のほたるかな

〔靈堂〕昭12

飯田蛇笏

ぜんまいのの字ばかりの寂光土

〔華嚴〕昭14

川端茅舎

吾妻かの三日月ほどの吾子胎やどすか

〔火の鳥〕昭14

中村草田男

たとふれば独楽のはぢける如くなり

〔五百五十句〕昭18

高浜虚子

白鳥といふ一巨花を水に置く

〔来し方行方〕昭22

中村草田男

外にも出よ触るるばかりに春の月

〔花影〕昭23

中村汀女

火を投げし如くに雲や朴の花

〔曼珠沙華〕昭25

野見山朱鳥

菜殻火やイエスの如くわれ渴す

同

同

燈の消えて野のあるごときいなびかり

〔紅絲〕昭26

橋本多佳子

物書きて天の如くに冷えゐたり

〔鷺鳴集〕昭27

永田耕衣

除夜の妻白鳥のごと湯浴みをり

〔雪標〕昭29

森 澄雄

去年今年貫く棒のごときもの

〔六百五十句〕昭30

高浜虚子

旭ひが木瓜に紅贈るごと誕生日

〔雪しろ〕昭30

野澤節子

螢火はやてや疾風のごとき母の脈

〔春風〕昭32

石田波郷

冬越す蝶荒地は母のごとく瘦す

〔礼拝〕昭34

津田清子

銀行員等朝より螢光す烏賊のごとく

〔金子兜大句集〕昭36

金子兜太

蹴あげたる鞠のごとくに春の月

〔愛日抄〕昭36

富安風生

降り積むごとき睡りは来ずや牡丹雪

〔まほろしの鹿〕昭42

加藤楸邨

摩天楼より新緑がパセリほど

〔遠岸〕昭47

鷹羽羽行

杭のごとく墓／たちならび／打ちこまれ

〔高柳重信全句集〕昭47

高柳重信

悪霊のごと花びらは鞠ふべし

〔夜溝〕昭51

佐藤鬼房

夏潮に道ある如く出漁す

〔汀子句集〕昭51

稲畑汀子

ほうたんの百のゆるるは湯のやうに

〔鯉系〕昭52

森 澄雄

寒月下あにいもうとのやうに寝て

〔火のいろに〕昭60

大木あま

桜餅夕暮山のごときもの

〔古志〕昭60

長谷川 權

日と月のごとく二輪の寒牡丹

〔八景〕昭61

鷹羽狩行

夕顔ほどにうつくしき猫を飼ふ

〔木の花〕昭62

山本洋子

さくらのような薄墨の朝いつかくる

〔半島〕昭63

宇多喜代子

秋茄子や初老といふは水に似て

〔武蔵野〕平2

鍵和田柚子

夜の椎雨のごとくに降るといふ

〔吉野〕平2

大峯あきら

露の夜は山が隣家のごとくあり

〔遅速〕平3

飯田龍太

羅うすもに螢のやうな子を宿し

〔雪女〕平4

眞鍋吳夫

船のやうに年逝く人をこぼしつ

〔船のやうに〕平6

矢島渚男

行く秋の月光花のごとくなり

〔知己〕平7

岡本 暉

夏桑の祭のごとく照りわたり

〔二木一草〕平7

黒田杏子

うつむいて父は昏めり餅のごとく

〔あらくれし日月の鈔〕平7

八田木枯

数ふるははぐくむに似て手毬唄

〔天竺〕平7

片山由美子

その一信植田の日矢のごとくなり

六月、〔聖母〕終刊

〔聖〕平8

友岡子郷

龍の玉地に喝采のあるごとし

〔百花〕平9

大石悦子

子を負へば涼しき月を負ふごとし

〔忘情〕平11

上田日差し

禅寺の八つ手の花は霜のやう

〔海鳴り星〕平12

今井杏太郎

梟や闇のはじめは白に似て

〔春の霧旅〕平10

齋藤慎爾

親鸞のごとき暑さとなりゆけり

〔夏の雨〕平13

平井照敏

仁和寺のごときが眠る春景色

〔微笑〕平13

鳴戸奈菜

考えていて海鼠のように少し滑る

〔大雲〕平13

寺井谷子

火のように苺ならべて食べにけり

〔雷光〕平13

五島高資

落花枝にかへるとみれば胡蝶かな

荒木田守武

病雁の夜さむに落て旅ね哉

松尾芭蕉

雪の上の猫の足跡梅の花

某海軍士官

糸瓜咲て痰のつまりし仏かな

正岡子規

流燈や一つにはかにさかのぼる

飯田蛇笏

水枕ガバリと寒い海がある

西東三鬼

兵隊がゆくまつ黒い汽車に乗り

同

すつばだかのめんどりとなり凍て吊るされ

三橋鷹女

秋の航一大紺円盤の中

中村草田男

さえざえと雪後の天の怒濤かな

加藤楸邨

大山はナポレオン帽春の雲

川端茅舎

朴散華即ちしれぬ行方かな

同

白鳥といふ一巨花を水に置く

中村草田男

天よりもかゞやくものは蝶の翅

山口誓子

海に出て木枯帰るところなし

同

火の奥に牡丹崩るるさまを見つ

加藤楸邨

百方に餓鬼うづくまる除夜の鐘

石田波郷

木の実独楽ひとつおろかに背が高き

橋本多佳子

筆とればわれも王なり塗火鉢

杉田久女

寒星や神の算盤ただひそか

中村草田男

葛城の神の鏡の春田かな

松本たかし

高熱の鶴青空に漂へり

日野草城

舌は帆柱のけぞる吾子と夕陽をゆく

金子兜太

金魚玉とり落しなば舗道の花

波多野爽波

一夜照りし春燈の瘦せ暁紅に

野澤節子

果樹園がシャツ一枚の俺の孤島

金子兜太

日光は太陽の塵蟬蚪生まる

鷹羽狩行

淫乱や僧形となる魚のむれ

永田耕衣

日の鷹がとぶ骨片となるまで飛ぶ

寺田京子

ふるさとはひとりの咳のあとの闇

飯田龍太

蓮根掘りモーゼの杖を掴み出す

鷹羽狩行

秋風やひとさし指は誰の墓

寺山修司

出奔す母の白髪を地平とし

同

次は三鷹職安日本白蟻研究所前です

田川飛旅子

天網は冬の董の匂かな

飯島晴子

むらさきの藤房死者の忘れもの

秋元不死男

いつせいに柱の燃ゆる都かな

三橋敏雄

しぐれ色の鯨や鮒やどもる漁夫

古沢太穂

揚羽より速し吉野の女学生

藤田湘子

波乗りの鷗のむかし渡海僧

伊丹三樹彦

水ようかんといふ薄闇を掬ひけり

正木ゆう子

秋の蝶指一本で殺せるもの

宇多喜代子

涼風の一塊として男来る

飯田龍太

綿虫のよくよく見れば老の貌

能村登四郎

船は花嫁の白さや雲の秋

片山由美子

水仙のしづけさをいまおのれとす

森澄雄

水飲んで鈴となりけり更衣

岡本眸

みちのくの木偶の坊なり赤蕪

佐藤鬼房

波音が月光の音一人旅

坪内稔典

寒の闇煩惱とろりとろりと燃ゆ

〔花水〕昭2

日野草城

啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々

〔葛飾〕昭5

水原秋桜子

我去れば鶏頭も去りゆきにけり

〔松本たかし句集〕昭10

松本たかし

山々の男振り見よ甲斐の秋

〔五百五十句〕昭18

高浜虚子

海に出て木枯帰るところなし

〔遠星〕昭22

山口誓子

山の冬日射しきて鉢の中に開く

〔来し方行方〕昭22

中村草田男

寒月に大いに怒る轍あり

〔榎〕昭25

秋元不死男

ひややかに夜は地を送り罌雲

〔百戸の燈〕昭29

飯田龍太

青梅が籠に身をつめ夜の豪雨

〔未明言〕昭30

野澤節子

雁ゆきてまた夕空をしたたらす

〔途上〕昭30

藤田湘子

日輪は胡桃の花にぶらさがる

〔冬青空〕昭32

山口青邨

くもること忘れし空のひばりかな

〔流寓抄〕昭33

久保田万太郎

熟睡子を青鳶の蔓のぞきこむ

〔白鷺雨町〕昭33

大野林火

鏡餅暗きところに割れて坐す

〔妾身〕昭37

西東三鬼

一つ一つ考へをもち蟻はしる

〔紅葉の賀〕昭37

阿波野青畝

天一物も与ふなきこの冬日影

〔椿花集〕昭41

飯田蛇笏

猫の子の鈴も中也の詩を訪ひに

〔旅鶯〕昭42

平畑静塔

栗笑めりそこまでの地を未だ踏まず

〔酒中花〕昭43

石田波郷

とくとくと泉脈うち月くらし

〔銃身〕昭44

鷲谷七菜子

もぎたての白桃全面にて息す

〔和語〕昭45

細見綾子

雪ふると百済恋しき観世音

〔幻日〕昭46

野見山朱鳥

ぼつたりと蠢跳んで闇閉ぢにけり

〔猫町〕昭49

平井照敏

海わたる魂ひとつ夜の秋

〔新経〕昭49

桂 信子

鳥寄せてまたあそぶ木や齋粥

〔秋取冬蔵〕昭50

宇佐美魚目

山神の富登おそろしや紅葉狩

〔三上挽歌〕昭51

沢木欣一

いや白く雪嶺媚びぬ彼岸前

〔山河〕昭51

相馬遷子

紅梅や枝々は空奪ひあひ

〔月步抄〕昭52

鷹羽狩行

蓮枯れてしまへば風の笑はざる

〔藍微塵〕昭54

石原八束

稲妻や夜も語りある葦と沼

〔木下夕爾全句集〕昭57

木下夕爾

これ以上澄みなば水の傷つかむ

〔風景〕昭57

上田五千石

かたくりは耳のうしろを見せる花

〔観音〕昭57

川崎展宏

若狭乙女美し美しと鳴く冬の鳥

〔詩經國風〕昭60

金子兜太

降る雪の勢ひあまりて振れけり

〔十指〕昭60

岡本 眸

蕎麦刈つて風棲む村となりしかな

〔花行脚〕昭62

角川照子

海姫の黒髪曳けり若布舟

〔飛鳥〕昭61

鍵和田袖子

雲湧けり万緑を滝かけのぼる

〔出雲〕昭62

原 裕

少年を囓む歓喜あり塩蜻蛉

〔菴室〕昭62

永田耕衣

烏瓜ひとつが旅に出てゆけり

〔春晩〕昭63

庄司圭吾

雪山の眉を上げゐる春の夕

〔所生〕平1

森 澄雄

コンドルと憂ひをわかつ冬帽子

〔寒晴〕平2

飯島晴子

囀りの中絶叫の鳥ありし

〔塔〕五集 平2・12

岡田日郎

寒鴉道士と黒を競ひけり

〔塔〕五集 平2・12

有馬朗人

秋の灘大魚逆立ちしてゐたり

〔夏月集〕平4

宇多喜代子

右顧左眄腰を落せる寒鴉

〔重華〕平5

日原 傳

まくなぎの待ち伏せに遭ふ坂がかり

〔易水〕平6

能村登四郎

悪相の瓜を引き出す蔓たぐり

〔百花〕平9

大石悦子

遁走の木の实拾へば田原坂

〔風の木〕平9

野中亮介

帰る鳥帰る相談してをるや

〔夏のこと〕平9

辻 桃子

犬吠えて夕日呼び込む雪解谷

〔塔〕六集 平10

宮津昭彦

春の雷弱音を吐いて失せにけり

〔中原道夫一〇〇八句〕平11

中原道夫